



国際シンポジウム参加記

料をもうまく利用して、非文字資料の意味化をさらに深めていかなくてはと思った。

しっかりした理論を土台にして、比較研究を進めなが

ら、非文字資料が主導権を握る文化理論を作り上げれば、失われた歴史の復権はある程度できるのでは思いながら会場を去った。

文化表現に対する理解

織田 順子 (ブラジル サンパウロ大学日本文化研究所所長)

この度、2005年11月に神奈川大学21世紀COEプログラム第1回国際シンポジウムに提携研究機関であるサンパウロ大学文学部附属日本文化研究所の代表として参加できたのは実に意義深いものでした。シンポジウムのテーマとなった「非文字資料の記録と体系」は、日本語学を専門とし、文学部日本語日本文学講座で常に文字・漢字のことを話し、学生たちに対する文章読解の練習に明け暮れる私には目新しいものでした。

今回のシンポジウムに参加して改めて思ったのは、文字や文章の読解を教えるにも、その表現の根底にある書き手の意志が、またその表現内容の根底に隠れている文化的要素がわかるようにならなければいけないということです。このような要素の理解や説明には、時として直感的な、経験などによる説明に頼ることがあり、より体

系的な理解があればと思うことがあります。やはりより多くの資料が体系化していれば、それらに対する認識も深まり、説明もしやすいということが言えます。

実際、サンパウロ大学文学部日本語日本文学講座を専攻とする学生の多くが、日本語にも興味はあるものの、日本の持つさまざまな文化表現に惹かれて入学するものが多く、文化理解の需要はこれからも高まる一方だと思われる。

こうした面を考えても、皆さまのお仕事はすばらしく、これからも積極的に学び取り、また一緒に勉強をさせていただくためにも、これからのさらなるご活躍を期待するものです。

最後になりましたが、シンポジウムのときにお世話になった皆さまに心からの御礼の気持ちを表します。

海外提携研究機関代表者懇談会

国際シンポジウムには私どもの7提携研究機関の代表者を招聘し、参加していただきました。韓国の延世大学の代表が急遽参加できなくなったため、全機関の代表が揃うことはできませんでしたが、6機関の代表が参加しました。シンポジウムの2日目午後1時間30分にわたり、海外提携研究機関代表者懇談会を開催し、神奈川大学COEと各機関の連携だけでなく、各国の代表が神奈川大学を介して相互に知り合い、親しく懇談する機会にもなりました。懇談の中では神奈川大学21世紀COEプログラムの研究事業についての協力・共同の方法について議論し、また若手研究者の相互訪問についても種々の問題点も含む多くの意見と提案をいただきました。

(福田)

日時：11月27日(日) 15:10～16:45

出席者：<提携研究機関> 王勇(浙江大学)・王曉葵(中山大学)・陳勤建(華東師範大学)・村上史展(香港大学)・許南麟(プリティッシュコロンビア大学)・織田順子(サンパウロ大学)

<神奈川大学> 福田アジオ・中島三千男・橋川俊忠

- 主な懇談事項：1. 若手研究員交換事業について
 2. 提携研究機関との研究者交流について
 3. 提携研究機関との共同事業について

